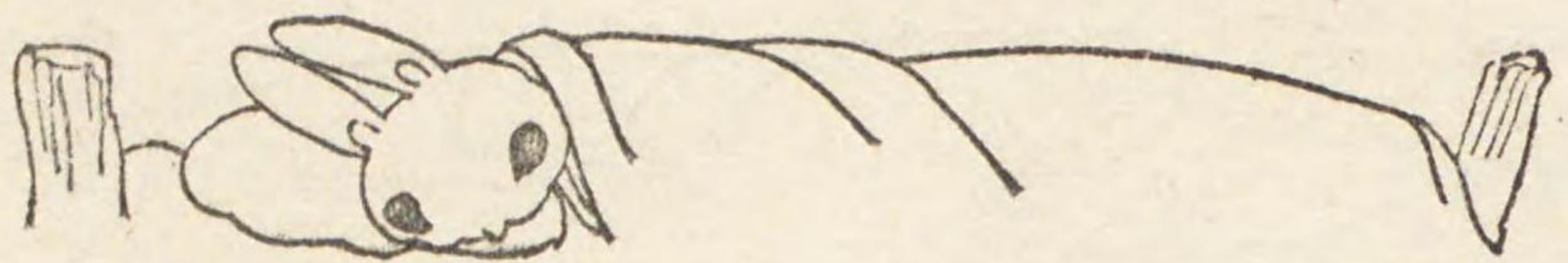


「なあ、父ちゃん、お邸の人みんないい人かな？」
「うん、きつといい人たちだべ。お嬢さまはおめえとおない年で、やつぱり小學校の五年生だよ。遊び相手になつてあげるがいいだ。」
平作もお邸の人たちと逢ふのは、はじめてであつた。この別荘は、つい一ヶ月ほど前に新築されて、前島といふ執事から、平作は頼まれて別荘番に雇はれたのであつた。

平作はこの漁村に生れて、漁師として働いてゐたが、二年ほど前に鯉取りに出て暴風雨に逢ひ、倒れた帆柱にうちのめされて、足をくじいて跛になつてしまつた。それで、もう漁師として働くことはできなくなつた。おまけに、妻には死なれるし、娘のお辰をかかへて、貧乏をかさねて來た。けれど、根が正直者なので、別荘番を見つけてほしいと頼まれた村長の



頭に、すぐに浮んだのは、この平作であつた。いつたいこの村は小さな漁村で、景色はいいけれど、なにぶん不便なので、別荘なども建たなかつた。それで、今度の別荘がいの一番で、それだけにもし別荘番のことで失敗でもすると、村としても大問題であつた。だから、村長はせひとも平作を別荘番にして、よく御用をつとめてほしいと考へたわけであつた。

「お嬢さまは、おきれいな方だべなあ。」

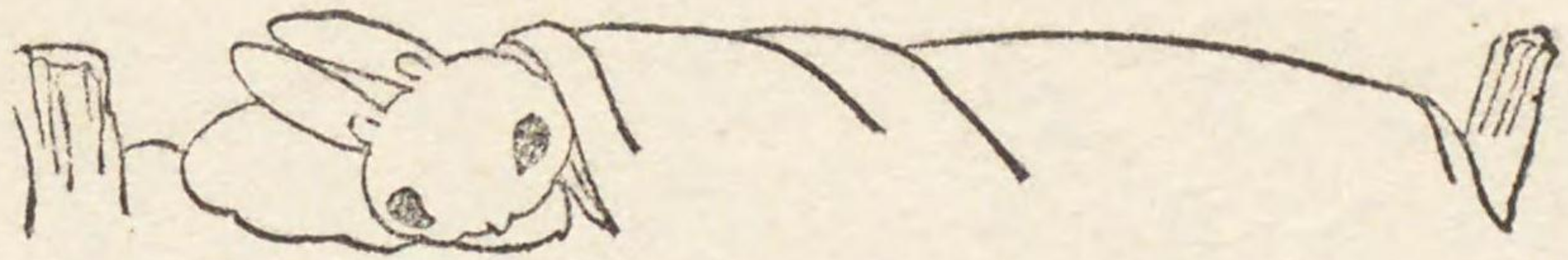
お辰は夢を見るやうな目をしていつた。

「それや、きれいだべ。そして、やさしい方にちげえねえよ。」

「おら、東京の話、たくさん聞かしてもらふだあ。」

「お前うれしいだべ。」

「うん。」



たしかに、お辰はうれしかった。考へただけで、胸がときめいた。なに
か、すばらしい世界が、目の前にあらはれて来るやうな気がした。

「お嬢さまは、本もたくさん持つてゐるだべな。」

「それや、持つて來なざるにちげえねえ。」

「おら、そしたら、本を見せてもらふだ。」

「ていねいにするだぞ。よごしたりしちや、なんねえぞ。」

「うん。」

「よく手を洗つてから、本を持つたぞ。」

「うん。」

お辰の想像は、どこまでも伸びてゆく。殊に、お嬢さまから、珍らしい
本を貸してもらふことを考へると、をどりあがりたいたいほどうれしかった。

お辰は、なによりも本が好きだが、学校の図書室にある本は、すつかり讀
んでしまつて、今はこれといつて、讀む本もなかつた。

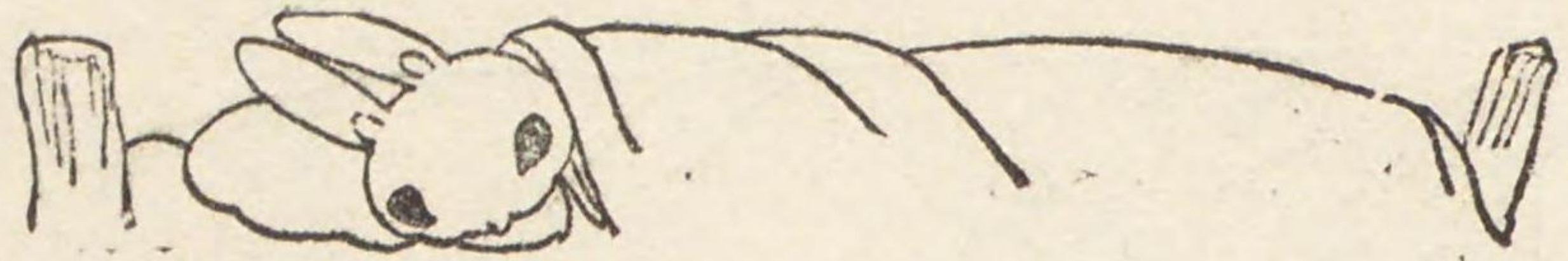
「おら、お嬢さまのためなら、どんなことでもしてあげるべ。そして、か
はいがつてもらふだ。」

お辰は、ふと草とりの手をやすめて、顔をかがやかしてつぶやいた。

父親の平作は、お辰がこんなに喜んでゐるのを見ると、やつぱりうれし
かつた。そして、心のなかで、いいお嬢さまであつて下さるやうにと、ね
がふのであつた。

(二)

明日といふ日が來た。



お辰が學校から歸つた時には、もうお邸の人たちは來てゐた。

「さ、お辰、あいさつして來るだ。ちやんと頭をさげてな……」

平作は、さつそくお辰に向つていつた。

「うん……」

お辰は、さすがに、いざとなると、胸がどきどきして來た。うれしいけれど、なんとなく臆病になるのであつた。

けれど、やつと勇氣を出してあいさつに行つた。みんなは椽側に腰をかけてゐた。

「ああ、爺やの娘だね。さう、お辰ちやんといふんだね。仲よく遊んでやつておくれ。」

奥さまは、お嬢さまと坊ちやんの方を見てさういつた。



お辰は黙つてなんべんも頭をさげた。

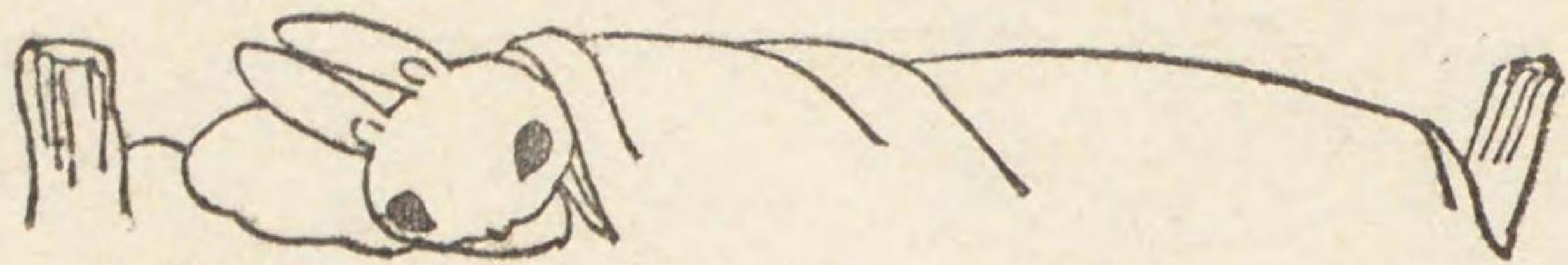
その時、お辰はま嬢さまを見た。考へてゐたよりも、もつと美しい方であつた。水色の縞のある洋服を着て、ほそいしなやかな脚に、うすい絹のクリーム色の靴下をはいてゐた、まるで繪のなかから、ぬけ出したやうな方であつた。お辰は心のなかで

「まあ、うつくしい。」

と、考へてぼんやり見とれてゐると、奥さまが、

「さあ、それでは美佐子さんも義夫さんも、このお辰ちやんにつれてもらつて、海の方へ行つてくるといいね。」

と、いふと、義夫はすぐに姉の美佐子の手をひつばつて、
「さ、行きませう。お姉ちやま。」



といった。

「あぶなくないやうにね……」

奥さまが、お辰にやさしく注意すると、お辰はま

た頭をさげた。そして、二人の

後について、

海へ行く小道

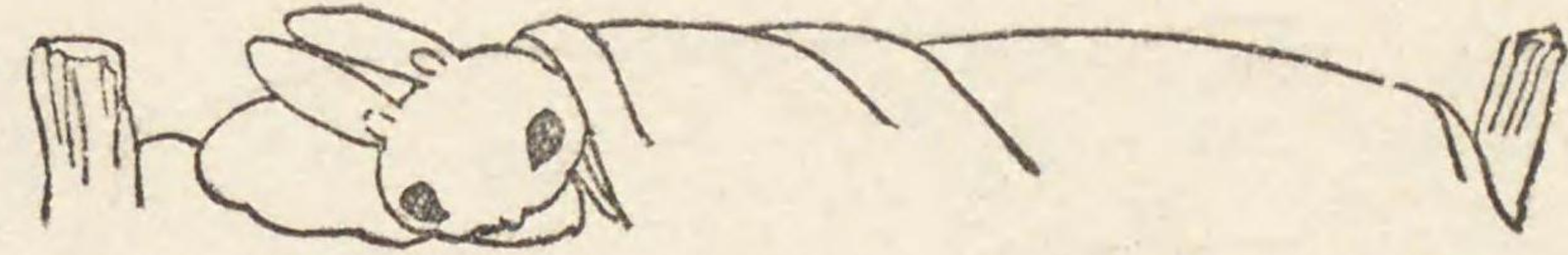
をおりて行つた。

子供同志は、す

ぐにおなじみになる。天狗岩といふ、海にのし出て

ゐる岩のところまで行くうちに、もう美佐子は、お

辰にいろんなことを尋ねてゐた。都ぞだちの美佐子に



は、波にうちあげられてゐる海草や貝などが、一つ一つ

珍らしいのであつた。

けれど、お辰

はおなじみにな

るにつれて、すこ

し氣持のへだたりが

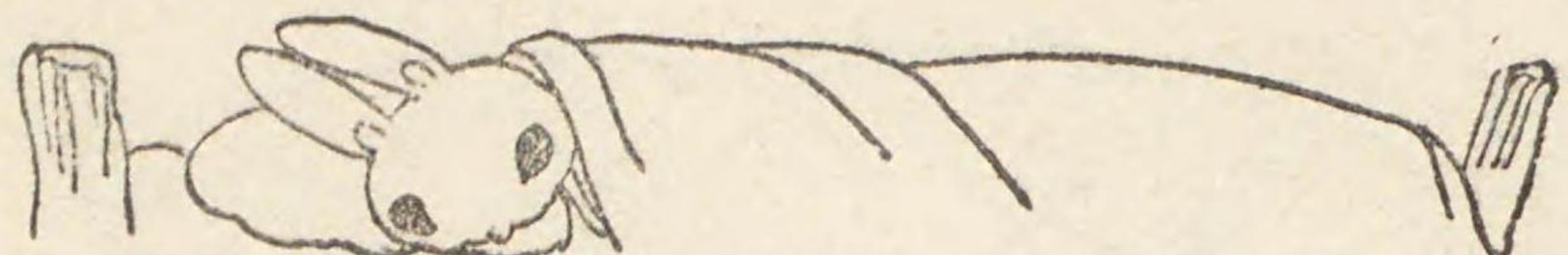
感じられた。美佐子は

美しいけれど、なんとな

く冷たい感じがした。お辰が田舎者であ

るのを、ばかにするやうな氣持を、きつと胸のなかに持

つてゐるにちがひないと思つた。だから、美しい顔のな



かに、とげとげした感じがたしかにあつた。それでも、お辰はあわてて、自分にいつて聞かせた。

「いけない。いけない。こんなこと考へちやだめだ。」

そこで、お辰はつとめて、あかるい氣持になつて、にこやかに話をした。

天狗岩へ來ると、三人は松のかけにすわつた。海に出てゐる漁船をかぞへたり、空に浮んでゐる雲の形を、いろいろなものにあてはめて、牛みたいたとか、人みたいだとかといつたりして、楽しく過した。

そのうちに、とつせん美佐子がたづねた。

「あんた、いい着物持つてゐる？」

「わしら持つてゐませんだあ。」



「あんた、それちや、着物ほしくない？ きれいな、いい着物。」

「いんや、ほしかありませんだあ。」

「お人形さんは？」

「ほしかありませんだあ。ほしい時は、自分で作りますだあ。」

「ほう、自分で作るの？ どんなお人形？」

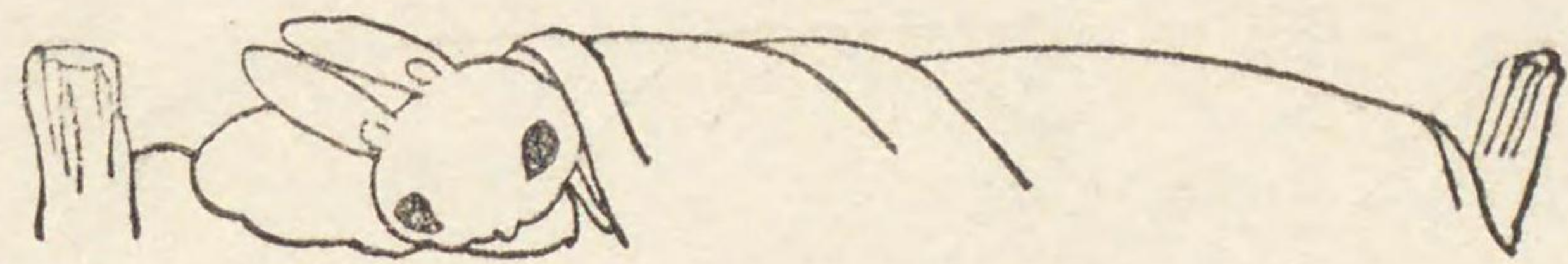
「紙で作りますだあ。」

「なあんだ、紙なの。紙のお人形なんか、しやうがないぢやないの。あたしなんか、西洋のお人形さんだつて持つてるのよ。今度見せてあげるわ、見たらきつとほしくなることよ。」

お辰は、それに對しては答へなかつた。

お嬢さまにはしやうがなくても、自分は紙のお人形を心からかはいがる





ことができると思つた。

やがて、三人は別荘へ歸つて來た。奥さまはみんなにお菓子を分けた。

「さあ、お辰ちゃんにもあげませう。」

奥さまはお辰の手のうへに、銀紙でつつんだチョコレートをおいた。お

辰は、はじめて見るお菓子に、おどろいて目をまるくした。

すると、美佐子は、唇もとに冷笑を浮べていつた。

「お辰ちゃん、それ西洋菓子よ、食べてごらん、おいしいから。あんた、

はじめてでせう。」

「はあ、むしろ、こんなの食べるの、もつたいないで……」

お辰は、美佐子がするやうに、銀紙を破つて、やすやすと口へ入れるのがためらはれた。

(三)

日がたつにつれ、お辰はお嬢さまのお相手になるのが、ひどくおつくうになつた。親しくなるにつれ、遠慮がなくなつて、美佐子はむやみに我まになつた。お辰はなんでも美佐子の、いひなり次第にならなければならなかつた。もし従はないと、美佐子はすぐに顔をふくらした。おまけに、美佐子は、いつもお辰を嘲けるのであつた。さういふわけで、お辰はせつかく待つた美しい世界が、早くも崩れてしまつたので、がっかりしてしまつた。

お辰は、美佐子から呼ばれても、草とりをするとか、掃除をするとかといつて、用事にかこつけてなるべく行かないやうにした。けれど、都を離



れて友達を一人も持たぬ美佐子は、やつぱり淋しいので、母親に頼んだりして、やいやいふやうにしてお辰を呼んだ。そのくせ、お相手をしてゐれば、むりなことをいつて、お辰を困らせるのであつた。

お辰は、ほんとに情ないと思つた。けれどその氣持を父親にいふことはできなかつた。とにかく父親が別荘番になつたおかげで、貧乏から救はれたことを、よく知りぬいてゐたからであつた。

ある晩、お辰は泣いてしまつた。それは、その日の晝間、美佐子の西洋人形が、どうしたわけか、寝かしても目をつぶらなくなつたのを、美佐子がお辰のせゐにしたからであつた。お辰は、たつた一度、それもそつと抱いただけなのに、美佐子はお辰の抱きやうがわるかつたからだといつた。「お母さま、お辰が抱いたもので、お人形が眠らなくなつたんですよ。」

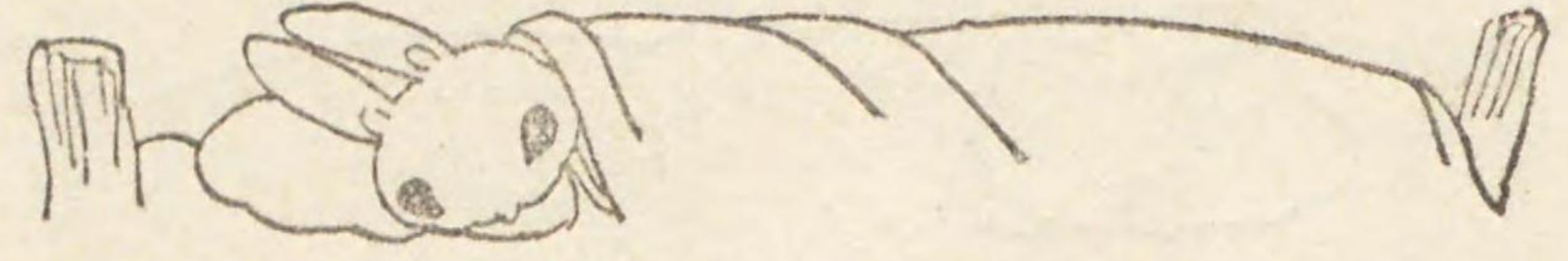


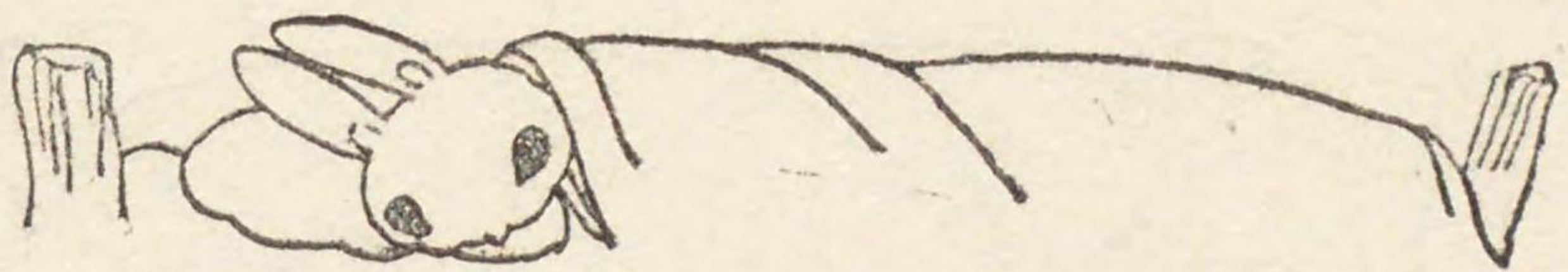
美佐子は、鼻聲を出して、母親にいひつけた。お辰は、仕方がなしに黙つて頭をさげたが、その時、目のなかが熱くなつた。

夜になつて、そのことを思ひ出すと、どうしてもがまんができなかつた。お辰はいつまでも泣いた。

その後、ある日、美佐子は算術の宿題をしてゐた。お辰がふとその部屋の外を通りかかると、美佐子はお辰を呼びこんで自分のできない問題をたづねた。もちろん美佐子としては、お辰にできる筈がないと思つて、困らすつもりだつたが、お辰はその問題を苦もなくといへしまつた。

けれど、それがいけなかつた。美佐子はお辰のことを生意氣だといひ出した。それでもお辰は、ちつと我慢したが、いよいよ我慢のならないことが起つた。





それは、ある日の夕方、美佐子の西洋人形がなくなつたのであつた。いくら探してもなかつた。さあ、さうなると、美佐子の目が光つた。それはお辰を疑ふ目つきであつた。お辰は、もしも美佐子が、自分に向つて、盗つたのではないかといつたら、どうしようと考えた。けれど、まさかそんなことはいふまいと打ち消してゐた。

ところが、とうとう美佐子はいつた。

「お辰、お前が盗つたんだらう？」

それを聞くと、お辰はすつかり怒つてしまつた。いくら別荘のお嬢さまであらうとも、この侮辱に堪へられようか。お辰はぐつと美佐子を眺みつけた。そして、右手をかたく握りしめた。握つた手がぶるぶるとふるふる。



「盗つたくせに、そんな顔をして……」

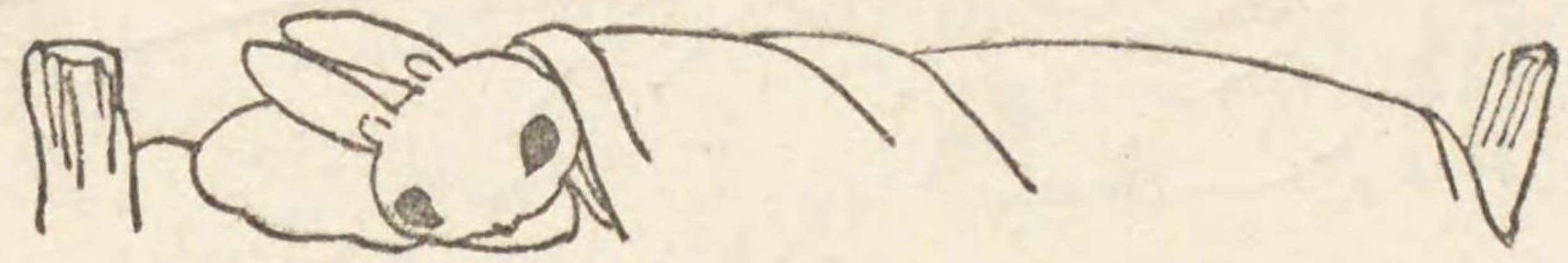
美佐子からさういはれると、お辰はわれを忘れて、握りこぶしで、美佐子の頬べたを、力いっぱいなぐりつけた。美佐子は火のついたやうに、金切聲をあげて泣いた。

(四)

それから、一時間とたたぬうちに、お辰と父親の平作は、別荘をすててゐた。平作は大きな風呂敷づつみ一つ脊負つてゐた。

別荘から五六町離れた砂丘のうへまで来ると、お辰は急にべたりと砂のうへに坐つてしまつた。

「どうしたのだあ？」



西洋人形
父親は涙ぐんだ目で、お辰の顔をのぞきこ
んだ。

「おら、これでいいけど、父ちゃんに、迷
惑かけたでなあ。」

「なあに、そねえなことがあるもんか、
おれたちは貧乏してるがええだあ。」

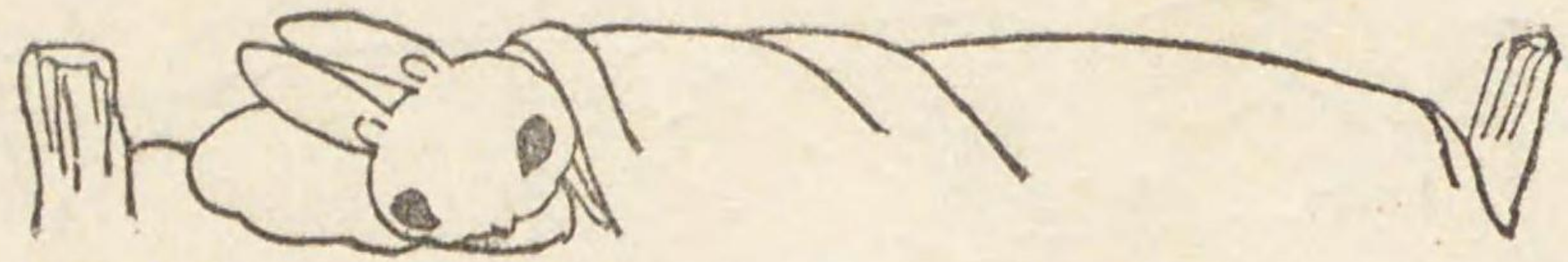
なまじつか、あんなところへ

勤めてると、人間が

だめにならあ。見い

あの女中どもを。あ

の女中どもも、田舎から出た時にや、正



直者だつたんだ。だけど、あんな
家へ

奉公

して

るんで、

不正直に

なつて、今

ちやお追従は

かりいつて、その

くせ蔭ちや悪口いつてゐやがるだあ。」

「だけど、父ちゃん、こねえなこと、おらがしたんで村長さん怒るべえ





な。」

「なに、怒るもんぢやねえ。もし怒つたら村長さんの方がわるいだあ。おれたち、この村に住んでやらねえや。ほかへ行くだあ。なにもこの村にはかり、おてんとさまは照りやしねえよ。」

その時、海のかなたに、赤い夕日が沈んで行かうとした。

二人はそれを眺めたが、いひ合せたやうに手を合せて拜んで、いつまでも、いつまでも頭をたれてゐた。

やがて、二人は無言のまま立ちあがつて、ざくりざくりと砂をふんで、砂丘をおりて行つた。平作の跛の足は、ともすると危なくよろめいた。その度に、お辰は父親の腰をささへてゐる手に、ぐつと力を入れた。

砂丘をおりたところに、草むらがあつた。そこに白いものがあるのを、



ふと父親が見つけた。父親は思はず立ちどまつた、お辰も

「おや？ なんだらう？」

と思つて、すぐに小走りに足を早めてそこへ行つて、かがむやうにして見た。

「父ちゃん！」

お辰は思はず聲を出した。そして、その白いものを取りあげた。

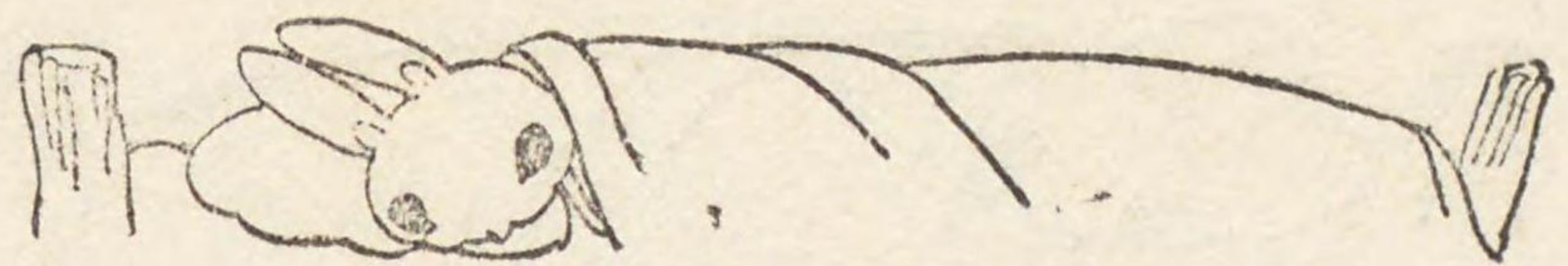
「人形だあ！」

お辰は、また叫んだ。

「さうか、人形か！」

平作は、跛をひきひきすぐ近づいて來た。

ああ、それは、この事件の原因になつた美佐子の西洋人形であつた。白



い絹きぬの服かみは引きさかれ、金髪きんぱつは亂みだれ、顔かほには明あきらかに齒はのあとがついてゐた。

「犬いぬが持つて來きたんだよう、なあ父とうちゃん！」

「うん。」

二人ふたりの目めには、ずんずん涙なみだが溜たまつて行いつた。

西洋人形せいやうにんぎやうも、悲かなしさうな目めで、二人ふたりを見みてゐるやうであつた。二人ふたりの悲かなしい運命うんめいを、あはれんでゐるやうであつた。

「お前まへに口くちがきけたらなあ。」

お辰たつは、しみみとつぶやいた。

「さうよ、お前まへに口くちがきけたら、お辰たつが盜とつたんぢやないことをお嬢ぢやうさまに話はなししてくれるだらうになあ。」

平作へいさくも、うなづきながらいつた。

「なあ、父とうちゃん、この人形にんぎやうをどうしようか？」

お辰たつがさういふと、平作へいさくはちよつと考かんがへてゐたが、

「だれかに、逢あふだらうから、そしたら、別莊べつさうへ届とどけてもらはうよ。」

といつた。

そこで、お辰たつはそのまま人形にんぎやうを胸むねへおしあてるやうにして抱かかへて、父親うちおやといつしよに歩あいて行いつた。

しばらく行いくうちに、松公まつこうといふ子こ供どもに逢あつた。平作へいさくはすぐに聲こゑをかけた。

「おい、松公まつこう。すまねえけど、この人形にんぎやうを別莊べつさうへとどけてくんねえか。」





松公は、さういつたものの、平作とお辰をまじまじと眺めた。風呂敷づつみを脊負つてゐるその姿は、子供心にもふしぎでならなかつた。

「をちさんは、別荘を出たんけえ。」

「うん。」

「どうして出たんけえ。」

「おれたちのゐるところぢやねえだ。」

「ふん。」

松公は、わかつたやうな、わからないやうな、妙な顔をしてゐた。

「それぢや、頼んだよ。」

お辰はさういつて、松公の手に人形を渡さうとしながら、人形をもう一度抱きしめて心のなかでいつた。



「貧乏はしてゐても、わしら正直だつてことを、お嬢さまに教へておくれよ。」

松公は、人形を受けとると、

「なんだ、犬にかまれてる。」

といつた。

赤い夕日が、三人の顔を赤く染めた。そして、鷗がたくさん海のうへを飛んでゐた。

森の子鳩

(一)

「さあ、では行つておいで。いいかい、きれいな世のなかを見て来るのだよ。」

父鳩はさういつて、子鳩の姿を愛しさうに見まもりました。そして、どうか無事に飛んで歸つて来るやうに、また、世のなかのきれいなことを、たくさん見て来るやうにと、祈らずにはゐられませんでした。

母鳩は氣がよわいので、もう目につばい涙を浮かべながら、幾度となく子鳩を抱きしめました。その度に、子鳩の白い羽根に、涙がはらはらとか



かりました。

「お母さま、大丈夫ですよ。安心してゐて下さい。ぼくよく氣をつけて行きます。それから、どんなことがあつても、お約束の五日目には、きつと歸つて來ますからね。」

子鳩は、さういつて母鳩をなぐさめるのでありました。さういはれると母鳩はむりにも安心しようとするのですが、涙はなせかとまりませんでした。

「さあ、それでは、出かけておいで、いつまでも、かうしてゐてはきりがない。お日さまのあがらないうちに、行きなさい。」

父鳩は、早く出かけるやうに勧めました。

「では、たつた一度だけ抱かせて下さい。それでお別れにします。」





母鳩がさういふと、父鳩は、

「ああ、いいとも、もう一度お抱き。それから元氣よく行かせるがいいよ。」

といつて、顔をそむけましたが、その時、父鳩の目にも、別れを惜しむ涙が、ちらつと光りました。

お許しが出たので、母鳩は長いあひだ子鳩を抱きしめたり、頬ずりをしたりしました。

子鳩は、初めての一人旅に出るのが、うれしくてたまりませんでしたから、お母さまがこんなにも別れを悲しむのが、すこし變な氣がしました。だから、お母さまに抱きしめられてゐる時も、つぶらな目をくりくり輝かしながら、これから飛んで行く世のなかのことを、いろいろ想像してゐま



した。

「もう、いいだらう。さあ、元氣よく行かせようぢやないか。」

父鳩にさういはれると、やつと氣をとりなほして、母鳩は子鳩をはなしました。

「ええ。もう行かせなくてはなりませんでした。では、行つておいで。よく氣をつけておくれよ。」

父鳩もいひました。

「さあ行つておいで！」

子鳩は、元氣いつぱいの聲で、

「行つてまゐります。」

と、いひながら、しつかり羽根を動かして、この森の巢を出て行きました



た。

森の樹のあひだを、上手に飛びぬけて、子鳩の影は見る見るうちに、小さくなつてしまひました。父鳩と母鳩は、ちつとその影を見てゐましたが、

「なあに、さう心配したものでもないよ。あの元氣なことはどうだ。ずるぶん羽根も強くなつたらしいせ。大丈夫きれいな世のなかを見て、約束の五日目には歸つて来るよ。」

と、父鳩がいひました。

「ええ、きつと歸るでせうよ。もう今さら心配したつて仕方ありません。このうへは無事に歸つて来るやうに、神さまにお願いするよりほかはありません。」

「まつたくだ。」

父鳩は、母鳩の言葉に合槌をうちました。

けれど、次の瞬間、小さくなつた子鳩の影が、針のさきでつついたほどになつて、ふいに青空のなかにかくれてしまつた時には、

「あつ！」

「あつ！」

と、父鳩も母鳩も、思はず叫び聲をあげました。そして、心細いやうな顔をしながら、青空をいつまでも眺めてをりました。

ところで、森の子鳩は、なせ旅に出て行くのでせう？

それにはわけがあるのです。それは鳩の掟として、子鳩が飛べるやうになると、勉強のために世の中を、見せにやらなければならぬのでした。





それも親鳩がつれて行かずに、子鳩だけで行かなくてはならないのでした。そして、五日のあひだに、世のなかのきれいなことを、勉強して歸つて來ると、はじめて、りつばな鳩として、仲間からも尊敬されるのでありました。

こんなふうにしてゐましたから、鳩は代々やさしい美しい心を持つことができました。もし心がけがよくなければ、その鳩は勉強しに行つても、わるいことや、おもしろいことに心が迷ひ、たうてい五日目に、歸つて來ません。歸つて來なければ、親鳩も死んだと思つて、あきらめてしまふのです。つまり、この五日の旅は、子鳩がりつばになるか、わるくなるか、その試験なのであります。

森の鳩たちは、このやり方を、獅子のやり方から習つたといふ事です。



獅子はじぶんのかはいい子供をわざと高い崖から落して、這ひあがつて來るほど、強い心を持つた子供を、育てあげるのです。それとおなじやうに鳩はじぶんのかはいい子供を、わざと世のなかへ飛んで行かせるのです。そして、ちやんと五日目に歸つて來た子鳩を、育てあげるのであります。

(二)

さて、子鳩はどうしたでせう？

羽根にまかせて、ぐんぐん飛んで行つた子鳩は、飛びながらも下の方を見て、なにか感心するやうな、きれいなことはないかと心を配つてをりました。

下の景色は、次から次と變りました。今まで森のなかで、見たこともな

いものが、次から次へと目にうつりました。

子鳩は、ときどき翼のかけに入れてある檜の葉っぱを出しました。それは地図でした、その葉っぱのうへには、父鳩が嘴でくはしく、地図を書いてくれたのです。それを見ると、なるほどあれが川といふものだな、あれが沿といふものだな、あれはお宮といふものだなと、ちやんとわかりました。

子鳩は下の景色と地図をとときどき見くらべては、たのしく飛んで行きました。たまに父鳩や母鳩のことを思ひ出しましたが、たいしてさびしくはありませんでした。

「だが、困つちやつたなあ、世のなかのきれいなことを見て来いといはれたけど、どうしたらいいんだらう？ どこへ行つたら、見られ

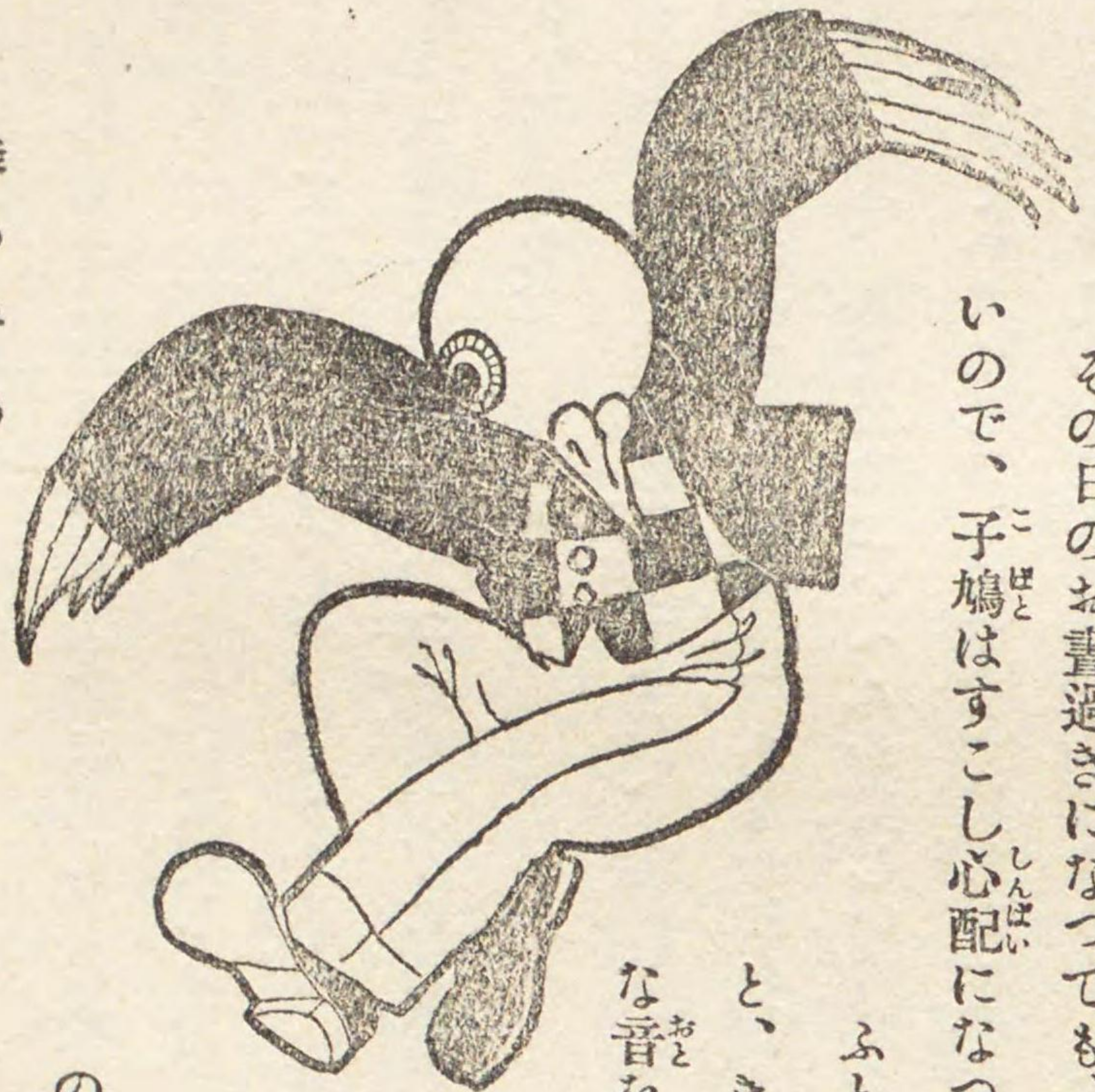


るんだらう？」

その日のお晝過ぎになつても、きれいなことが見つからないので、子鳩はすこし心配になつて来ました。

ふと、ある山かげを飛んでゐると、きれいな百合の花が、清らかな音をたてて流れてゐる谷川の岸に、咲いてゐるのが目に入りました。

「世のなかのきれいなことつて、きつとあの百合の花のことだらう、きれいな



心を持つてゐなければ、あんなに美しくは咲けない。」

子鳩はさう思ひながら、まつ白な美しい百合の花と、じぶんの羽根の色とを比べてみました。そして、どうも百合の花の方が、一だんと勝れてゐると思ひました、それで、子鳩はすぐに百合の花のところへ降りて行つてたづねました。

「もしもしぼくは森の子鳩ですが、世のなかのきれいなことを見るために旅に出て来たのです。それで、あなたにお伺ひしたいのですが、お見うけするところ、あなたはたいへん美しい方なのに、どうしてこんな山かげに、咲いていらつしやるのです。美しいお姿が、だれの目にもふれないといふことは、ほんとに惜しいものぢやありませんか。でも、きつとなにかわけがおりなものでせう、どうぞ聞かして下さい。」



百合の花は、はづかしさうに身體をゆすぶりました。その時、子鳩はぶうんといひ香りをかぎました。

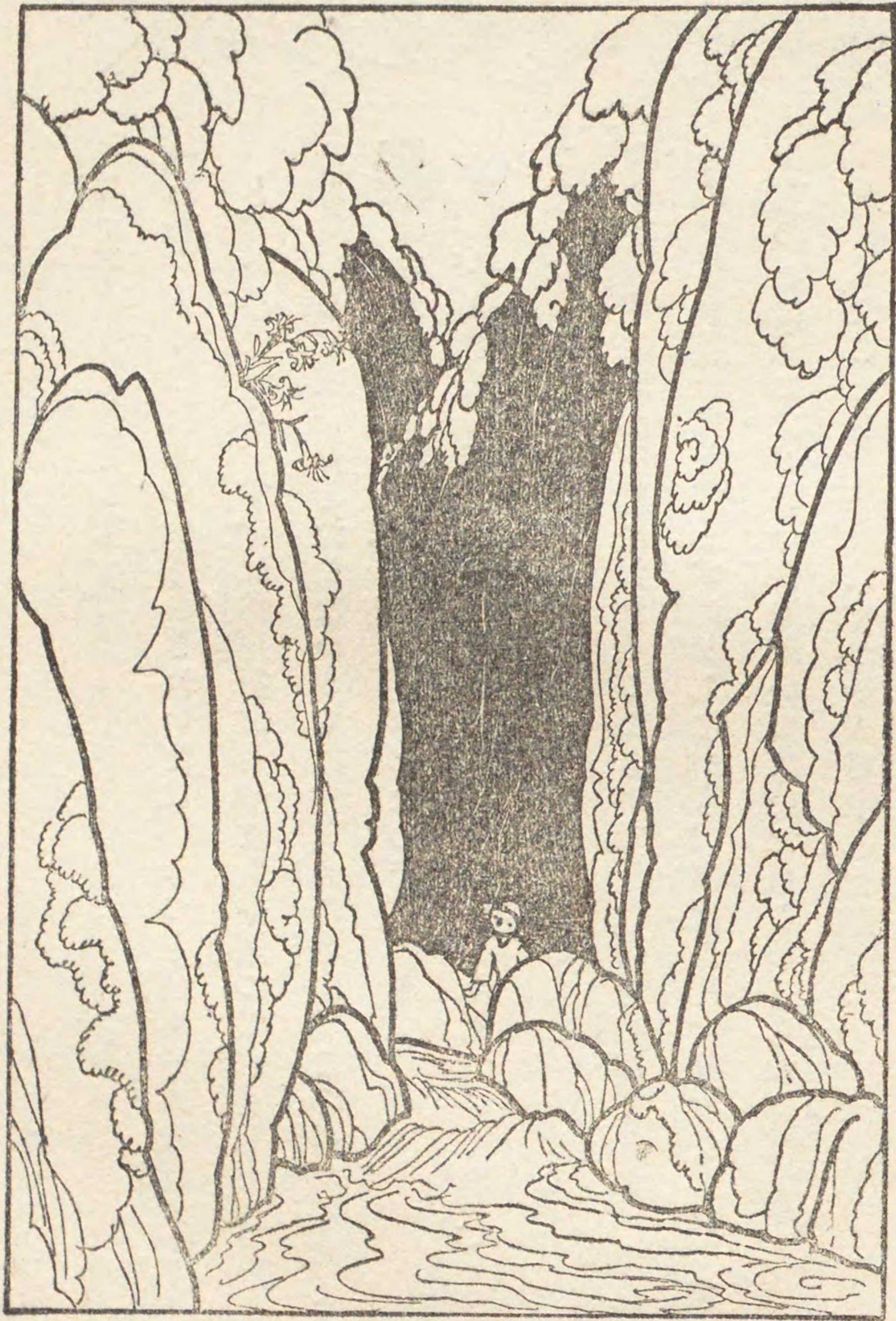
「いいえ、わたしはそんなに美しくはありませんのよ。なんのために、こんなところに咲くかとたづねられますと、わたしは御返事に困りますわ、でも、美しく咲きさへすれば、きつといつかは、だれかのために盡せるだらうと思つて、わたしはけつしてじぶんの務めを怠りません、わたしの務めは、ただ美しく咲くといふことですわ。」

百合の花は、つつしみ深い心を持つてゐましたから、へりくだつて申しました。

子鳩はこの花が、たいへん好きになりました。

ちやうどその時、谷川の向ふ岸に、身なりのきたない、貧乏な家の子供





らしい男の子が、やつてまゐりました。男の子は、なにか探してゐるらしくあちこちを見まはしてゐました。

「姉ちゃんの好きな百合はないかなあ。」

すすしい風が、男の子の、そのつぶやき聲をのせて來ました。男の子は里の方から、百合の花を探しに來たもののやうです。そして、百合の花が見つからないので、がっかりしたらしく、そのつぶやき聲には、なんとなく悲しいやうな、ひびきがありました。

百合の花は、それを聞くと、

「じぶんを役にたたせる時が來ました。」

と、いひながら、あたりの草のあひだから、伸びあがるやうにして、早く男の子の目につくやうにと思ひました。



男の子はふと顔をあげて、

「ああ、あすこにあつた！ きれいだな、きつと姉ちゃんも喜ぶぞ！」

と、いひながら、すぐに谷川をぼちやぼちや渡つて来ました。

それから、三十分とたたないうちに、百合の花は、この男の子によつて松林のなかの小さなお墓の前にさされたのであります。

男の子は、死んだ姉さんの好きな花を、とうとう見つけて来たことを喜びました。そして、その小さな手を合せて、長いこと拜んでゐました。百合の花も、じぶんを役にたたせることができたのを喜びました。そして、その美しい顔を、ますます輝かしながら、ほほゑんでをりました。するとお墓のまはりには、いい香りがいつぱいたちこめました。かうしたことを、子鳩はすつかり見ました。



「きれいな世のなかだ！」

子鳩はたいへん感心して、男の子がしたやうに、お墓の前へ行つて拜んでから、百合の花に向つていひました。

「なるほど、あなたのいふ通り、とうとうりつばな務めをなさいましたね。」

すると、百合の花は、さも満足さうに、

「ええ。」

といつて、うつとりした顔をしました。

(三)

次の日も、子鳩はなにかきれいなことを見たいと思ひました。そして、



大きな林のなかを飛んでみました。

すると、ある大きな樹に、啄木鳥がとまつて、こつこつと幹をつついておりました。子鳩は、いつたい啄木鳥が、なにをしてゐるのだらうと、思つて、そばへ行つてたづねてみました。

「啄木鳥さん、たいそう御精が出ますね。いつたい、なにをしていらつしやるんです？」

「おや、これはまあかはいらしい鳩さん。なにしてるつて？ あたし電信をうつてゐるのよ。あたしのお母さまはね、遠い國の動物園につれて行かれたのよ、だから、かうして電信をうつてるんですの。あたしはねえ、停車場で電信をうつてるところを見て來たのよ。電信つて、こつこつうつのねえ。」



子鳩はさういはれると、今朝見た停車場のことを思ひ出しました。そこでは黒い洋服を着た人が、ごちやごちやした機械の前で、なんだかかわからなけれど、こつこつと手でたたいて音をたててゐました。

「電信つてなあに？」

「遠くにある人に、こつちの心を知らせることができるのよ。」

「まあ、さうですか、あなたはお母さまにうつてるんでせう。」

「ええ、さうよ。」

「たださうやつて、こつこつ木をつついてゐて、聞えるでせうか？
機械

「さあ、わたしも知らないのよ。」

「ずるぶん頼りないんですね。」





「でも聞えても聞えなくても、あたしはかうしてうちたいのよ。一生懸命にお母さまのことを思つてうてば、聞えると思ふわ。もし聞えなくても、かうしてうつてるあひだは、お母さまのことを思ひ出して、それや楽しいんですもの。」

さういはれてみると、子鳩は啄木鳥の心はきれいだと思ひました。聞える聞えないといふことよりも、お母さまを忘れないといふことが、ほんたにりつばなことだと思ひました。

「なるほど、啄木鳥さんのいふことは、ほんとだ。」

子鳩は、すつかり感心してしまひました、それで、また啄木鳥に向つて「それぢや、さよなら、あなたのお母さまが、しあはせなやうに……。」と、いつて、林を出て來ました。



「たしかに、今日も、きれいな世のなかを見たな。」
子鳩はさう考へました。

(四)

三日目には、子鳩はこんなことを見ました。

ある小さな町の、学校のそばへ飛んで行つた時、ちやうど學校がひけて大勢の子供たちが、赤い頬べたを輝かしながら、歸つて行くところでした。子供たちは、てんでに肩から鞆をかけたたり、風呂敷つつみをかかへたりしてゐました。

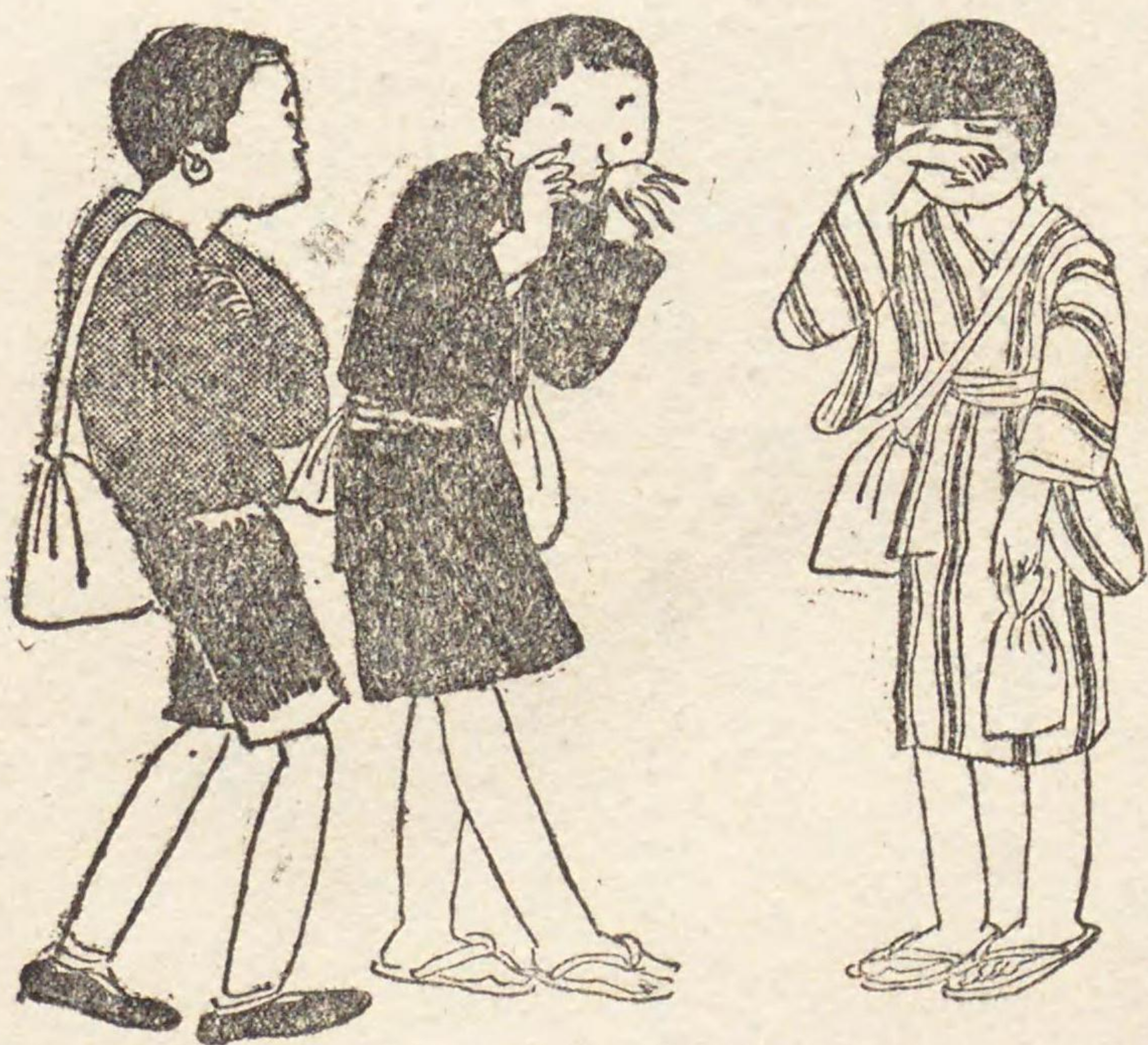
見ると、一人の女の子が一番あとから、しくしく泣きながら、歸つて行きました。



子鳩は、おやどうしたのだらうと思つて、そのあたりをぐるぐる飛びまはりながら、ちつと容子を見ることができました。

「やあい、まだ泣いてらあ。弱蟲だな。」

さういつたのは、見るからに意地のわるさうな男の子でした。その聲につれて、一かたまりになつてゐた男の子た



ちは、後をふりかへつて、わあッとはやしたてました。

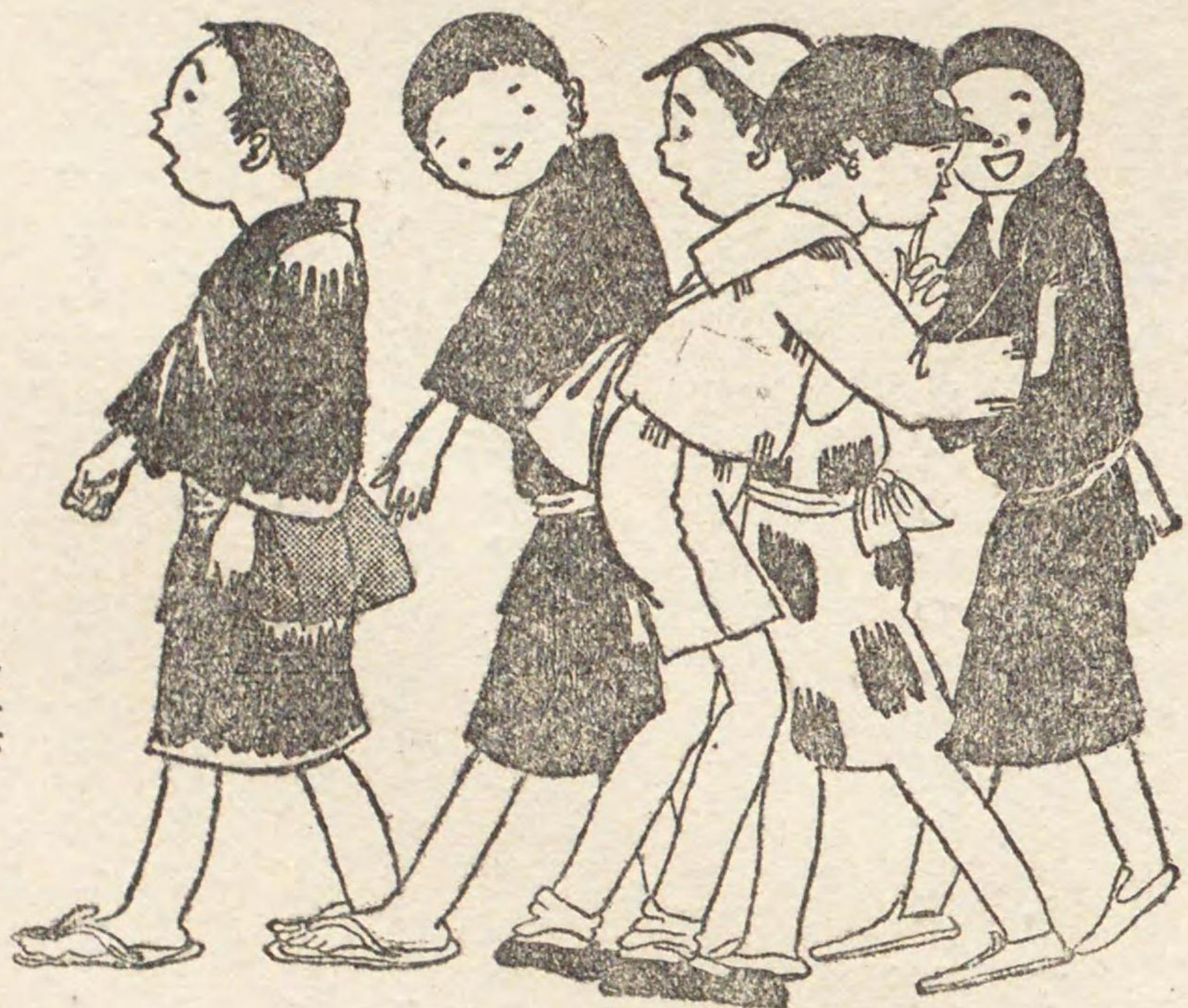
泣いても泣いても


父なし兒

あれあれ涙が

わいて来る。

驚いたことには、一かたまりの女の子たちも、男の子たちとおなじやうに、こんな唄をうたつてはやしたてるのでした。






みんなから、はやしたてられたので、その女の子はたまらなくなつたらしく、道のそばの草のうへにうつ伏して、くやしさうに泣きました。

子鳩は、なせお父さまのない子が、そんなにいちめられるのか、どうしてもわかりませんでした。ほんとなら、みんなして慰めてあげるべきだと思ひました、さう考へると、むしやうにその女の子が、いちらしくなりま

した。

その時、學校のなかから、一人の男の子が出て來ました。そして、草のうへに倒れて泣いてゐるその女の子を見ると、

「君、またいちめられたの。くやしいだらうねえ。あいつら學校では、先生がこはいものだから、あんまりいちめないけど、學校の門を出ると、すぐにいぢめるんだねえ。よし！ ぼくが君のかはりに、あいつらをひどい



目にあはしてやる。だから、泣かないでゐ給へね。」

と、いひながら、女の子をかかへるやうにして、立たせて、じぶんのハンカチで、涙をふいてやりました。

その男の子は、きりつとした、りこうさうな顔をしてゐました。子鳩はなんてやさしい男の子だらうと思ひました。

女の子は、まだ泣きぢやくりながら、

「ありがたう。だけど、あたし、がまんするわ。くやしいけど、あなたに頼んで、ひどい目にあはしたと思はれると、今度またあなたのない時にいちめられるんですもの。」

と、いつて、とめました。

「そんなことないよ。ぼくはみんなをつかまへて、いつて聞かせてやるだ

けなんだ。なあに、そんなに亂暴らんぼうなことはしやしないよ。だから、安心あんしんしてゐる給へね。」

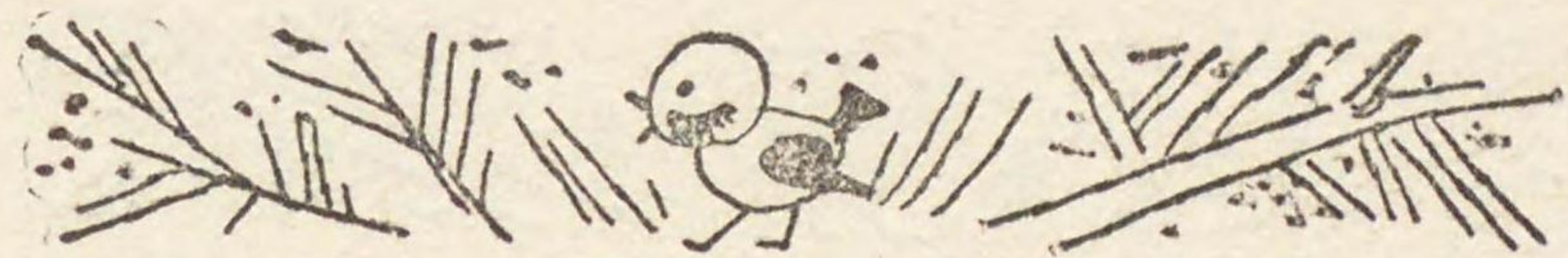
男の子をとこはさういつて、どんどんみんなの後あとを追おひかけました。そして、いつでも一番ばんはじめにいちめる、がき大將だいしやうをとうとうつかまへました。

「なせ君きみはあんなかはいさうな子こを、いちめるんだい？」

と、いつて、そのがき大將だいしやうの襟えりをつかんで、こづきまはしました。正しいことにはかなはないとみえて、がき大將だいしやうはすつかり閉口へいこうして、顔かほをしかめてをりました。

「君きみはあの子こに、あやまらなければいけないのだ、さあ、來給きたまへ。」

男の子をとこはさういつて、ぐんぐんがき大將だいしやうをひつばつて、かはいさうな女をんなの子このところへ來きました。ほかの子供こどもたちは、この男の子をとこの威勢いきせいにおそれ



て、今はもう遠くの方ほうへ逃にげて行いつてしまひました。

かうして男の子をとこは、このがき大將だいしやうをあやまらせました、そして、二度どといちめないといふ約束やくそくをさせました。


「なんて勇氣ゆうきのある、りつばな子こだらう！ これもやつぱり世よのなかの、きれいなことの一つだ！」

子鳩こばとはさう考かんがへながら、この男の子をとこに何とかお禮れいがしたいやうな氣持きもちになりました。

けれど、べつにお禮れいにあげるものもないので、一番白はんしろいやはからな胸毛むねげを、嘴くちばしでぬいて、そうつと、男の子をとこのかけてゐる鞆かばんのなかへ、入いれておきました。



(五)



子鳩は、四日目にも、きれいなことを見ることができました。それは夕方のことでした。お月さまが空に出て、空はうるほひに充ちた光で輝やいてゐました。しつとりした風が、静かに吹いてゐて、なんともいはれぬいい氣持でした。

それでも子鳩は、朝からまだきれいなことを見ないので、すこし心細く思ひました。羽根をはたはたと鳴らして、月の光を頼りに、あちこち飛びながら、どうかしてきれいなものを見たいと思ひました。すると、ふいにこんな言葉が聞えて來ました。

「姉ちゃん、お月さまは、どうしてぼくたちの後をついていらつしやるの

でせう？ ぼくが歩くと、そうら歩いて來るでせう。ぼくがとまると、やつぱりとまるよ。ほんとに、お月さまはをかしいな。」

すると、また、ちがつた聲が聞えました。

「あなたがおりこうだから、送つて來て下さるのよ。」

子鳩は聲のする方を見ました。そこには二つの人影がありました。小さい方が弟、大きい方がお姉さんだといふことは、すぐにわかりました。

「それちやお月さまは、いい方なんだね。あらッ、ぼくが曲つたら、やつぱり曲つてらしたよ。」

「ええ、さうねえ。」

なるほど、二人は今、道の曲り角を曲つたところでした。

子鳩はこのあどけない弟さんを、かはいく思ひましたので、そうつと

二人の後からついて行きました。
やがて、二人はお家の前へ来ました。

「お月さま、どうもありがたう。」

弟さんは玄關を入らうとしながら、送つて来てくれたお月さまに、大きな聲でお禮をいひました。弟さんの目には、お月さまがにこにこ笑つていらつしやるやうに見えたのかも知れません。

「ほんとに、なんてかはいらしい坊ちゃんだらう。どんなものでも、じぶんに結びつけて、お禮をいふのは、たしかに、おだやかな、きれいな氣持だ。さうだ、この氣持を失つてはいけない。この氣持さへ失はなければ、他人を憎むといふやうなことは、きつとありはしないのだ。」

子鳩は、そんなふうに考へました。そして、今日も世のなかの、きれいな



なことを見て、たいへん勉強をしたと思ひました。そして、ちやうど弟さんの姿が、玄關へ隠れようとする時、子鳩はかういはずにはゐられませんでした。

「かはいいい坊ちゃん、静かにおやすみなさい。いい夢をごらんないね。」
けれど、弟さんの耳には、それは、ただクウクウとしか聞えませんでした。

「姉ちゃん、今の聲、なんでせう？」

「さうね、なんでせう？ 鳩の聲のやうだつたわね。」

「ええ、きつと鳩ちゃんだ。ぼくおりこうだから、鳩も送つて来てくれたんだねえ。」

「ええ、さうよ、きつとさうだわ。」



「ぢや、ぼく鳩ちゃんにもお禮をいはう。——鳩ちゃん、ありがたう。」
子鳩もそれを聞くと、うれしくてたまりませんでしたから、
「どういたしまして。」

と、いひましたが、やつぱりその言葉は、クウクウとしか聞えませんでした。

「あらッ、また鳴いたわ、姉ちゃん。」

と、弟さんはいひました。それから、思ひ出したやうに、かうつけ加へ
ました。

「鳩ちゃん、明日、遊ばうね。」

そのまま、二人の影は、暗い玄關のなかへ隠れてしまひました。

子鳩は、ほんとにこの坊ちゃんと遊んだら、どんなにおもしろいだらう



と思ひました。けれど、もう明日は五日目ですから、どんなことがあつても、歸らなければなりませんでした。それで、明日の朝、早く出立するこ
とにして、とにかく今夜は、このかはいい坊ちゃんの家の軒下に、寝るこ
とにきめました。

子鳩は、その夜、夢のなかで坊ちゃんと遊びました。坊ちゃんも、白い
鳩とたのしく遊んだ夢を見ました。

(六)

あくる朝になつて、子鳩が目をさました時には、もうお日さまは、かな
り高くのぼつてゐました。

子鳩は、びつくりしました。今日はいよいよ旅もおしまひで、なつかし





いお父さまやお母さまのところへ、歸るのだと思ふと、
なんとなく氣持がそはそはしました。

世のなかのきれいなこと

を探してゐるあ

ひだに、むだな

時間がたつては

たいへんだと考

へて、とにかく

なつかしい森の方へ向つ

て飛んで行くことにしました。もしかしたら、

途中できれいなことに、ぶつかかるかも知れないと、考



へましたので……

お晝過ぎ、こんもり樹のしげつた大きな山へさしかかりました。

すると、ふいに、

「おい！」

と、荒々しい聲で呼びとめたものがありました

した。

驚いて聲のした方を見ると、一羽の鳥が太

い松の樹の枝にとまつてゐて、ぎよろぎよろ目

を光らせてゐました。

子鳩は、父鳩から話に聞いてゐたので、それを見るとすぐに、驚だなど

思ひました。



「なせ黙つて通るのだ？」

驚はどなりました。

「あなたが、そこにいらつしやることを知りませんでしたから。」

と、子鳩はすなほに申しました。

この時、子鳩は心のなかで、もうすつかりあきらめてゐました。なまじつか逃げたりしては、すぐに捕まへられて、ばりばりつと骨ごと食べられてしまふだらうと思ひましたので、強ひて落ちついてゐました。

「お前は鳩だらう？」

「さやうでございます。」

「おれは鳩を食べるのが大好きだ。」

子鳩はせつかく旅に出て、こんなに勉強をしたのに、ここで食べられて



しまふのかと思ふと、じぶんの身のうへが悲しくてなりませんでした。

すると、ふいに目の前に、お父さまとお母さまのなつかしい笑ひ顔が、はつきりと浮びあがりました。子鳩はその笑ひ顔をちつと見てゐるうちにあきらめの氣持になり、どうせ仕方がない、食べられるなら、りつばな最後をとげたいと思つて、

「どうぞ召しあがつて下さいませ。」

と、いひました。けれど、ひとりで涙があふれて来て、どうしてもとめることができませんでした。

「お前は泣いてゐるな。食べられるのが、おそろしいんだな。」

驚は子鳩の涙を見つけて、さうたづねました。

「いいえ、鳥のなかの王さまともいはれるあなたに、食べられるのは本望





でございませす。」

「本望だど？」

「はい、わたしみたいなの、つまりぬ者が、あなたのお腹の足しになれば、まことに結構だと思つてをります。」

子鳩は、その時、谷川に咲いてゐる百合のことを、なせか思ひ出しました。

「では、なせ泣くのか？」

「父や母のことを思ふからです。ならうことなら、父や母が、このさき丈夫で暮すやうに、お祈りをしてから、食べていたいただきたいと思ひませす。」

子鳩は、その時、なせかあの啄木鳥のことを思ひ出しました。

「ふん。さうか、それでは、そのほかに、なにかいひたいことがあるか？」

と、鷺はたづねました。

「これといつて、べつにありません。ただ鳥の王さまともいはれる方が、罪のない者を食べるといふやうなことを、わたしはともかくとして、今後はなさらしないで、ほしいと思ひませす。」

子鳩は、その時、勇ましくて正しかつたあの男の子のことを、なせか思ひ出しました。

「よし、それちやお祈りをするがいい。お祈りを済したら、食べてやるぞ。それから、今後は罪のない鳥を食べるのはよさう。」

鷺はさういつて、かちかちと嘴を鳴らしたり、その鋭い爪を枝にこすりつけて研いだりしました。

お祈りを済した子鳩は、なせかあどけない坊ちゃんを思ひ出しました。





そして、思はずかういひました。
「では驚さん、さようなら！ よくわたしのいつたことを、承知して下さ
いましたね、ありがたう。」

その言葉のひびきは、ほんとにあどけないものでした。子鳩はさういつ
てから、じぶんの身に降りかかった、おそろしい運命を、ちつともおそれ
ずに、ちつと目をつぶつて、食べられるのを待ちかまへました。

驚はすつかりこの子鳩の心に感心してしまひました。なんといふ、きれ
いな心だらうと思ふと、今はもう食べるどころの騒ぎではありません。急
にぐつたりと力がぬけて、その拍子に、肢は枝から離れて、くらくらツと
目まひがしたかと思ふと、そのまま深い谷のなかへ落ちてしまひました。
子鳩はおやツと思つて目を開けました。そして、驚が谷へ落ちて行くの



を見ると、たいへんだと思ひながら、追ひかけて行きました。

谷の底まで落ちた驚は、岩角に身體をぶつけて痛がつてゐました。子鳩
は谷川から水を口にふくんで来て飲ませたり、身體をこすつてやつたり、
柔らかい草をとつて来て、身體の下へ敷いてやつたりしました。親切なそ
の介抱のおかげで、驚はすつかり元氣になりました。

驚は、子鳩の親切に、ますます感心して、

「お前はなんてやさしい心をもつた鳥だらう！ほんとに、ありがたう、
どうか早く歸つておくれ。そして、お父さまとお母さまに、元氣な顔を見
せてあげておくれ、もう大丈夫だから、おれのことには心配しないでお
くれ。」
と、いひました。

鷺の言葉つきは、さつきとすつかりちがつてゐました。鷺の心は、まるつきり變つてゐたのです。子鳩は、鷺がたいへんいい心になつてくれたので、

「それでは、お大切に。」

といつて、うれしそうに歸つて行きました。

(七)

「ふしぎなこともあるものだ。」

子鳩は、森の方へ向つて飛びながらも、鷺のことが、いろいろに思ひ出されてなりませんでした。

「あの鷺が、あんなにいい心になるなんて、ほんとにふしぎだな。ぼくを



食べようとした時、きつと急に病氣になつたのだ。けれど、助かつてよかつた。」

子鳩はそんなふうに思ひました。

その日の夕方、子鳩は無事になつかしい森へ歸りました。お父さまとお母さまのお顔を見た時、ほんとにうれしいと思ひました。わづか五日でしたが、この旅は長い長い旅のやうな氣がしました。

お父さまもお母さまも、やつぱりおなじことでした。子鳩の顔を見ると「ああ、よく歸つて来てくれた。」

「すゐぶん、たいへんだつたらうね。」

と、いつて、あかるい喜びを顔いつばいにたたへて、なん度もなん度も子鳩を抱きしめました。



その夜、巢のなかで、子鳩はじぶんの見て来たことの話をしました。世のなかのきれいなことを見たのは、たいへん勉強になつたといひました。そして、あんなきれいなことをお手本にして、りつばな鳩になりたいといひました。

「よかつた。よかつた。いい勉強をしたね。」

と、父鳩はたえずにこにこして、子鳩の話聞いてゐました。母鳩もうれし涙をこぼしながら、一心に耳をかたむけてゐました。

五日目のことを、子鳩は詳しく話して、最後にかういひました。

「ねえ、ぼく、ほんとにふしぎだと思ふんです。急にあの驚は、その時、病氣になつたんですもの。」

すると、父鳩も母鳩も、飛びあがつて喜びました。そして、巢の天井で



こつんと頭をぶちました。けれど、ちつとも痛いとは思ひませんでした。

「えつ！急に病氣になつたつて？はつはつはつ、さうぢやないんだよ、

それやね、お前の心がきれいだつたからだよ。世のなかのきれいなことを見て、よく勉強ができたからだよ。きれいな心といふものは、あのおそろ

しい驚にさへ勝つたんだよ。」

父鳩はさういひながら、かはいくて、かはいくてたまらないといふやうに、子鳩をきつく抱きしめました。もちろん、母鳩もその次に子鳩を抱き

しめました。

子鳩は目をくりくりさせながら、

「變だなあ、たしかに病氣が出たらしいんだがなあ。」
と、つぶやいてゐました。





森の子鳩

二五〇

でも、そのうちに、疲れが出て、父鳩と母鳩に抱きしめられたまま、その暖かいやさし胸のなかで、ぐつぐつと眠つてしまひました。

「明日になつてから、この話は、森の鳩たちに、それからそれへと傳つてどんなにこの子はみんなから尊ばれるだらう！」

と、思ふと、父鳩も母鳩もなかなか眠れませんでした、そして、かほるがはる、子鳩の顔をのぞきこんでは、おたがひにうれしさうな顔をしてをりました。

五年生児童話
少年者
水谷さまる年別児童話

昭和九年十月十五日印刷
昭和九年十月十八日發行

定價金八十錢
(送料十二錢)

著者 水谷まさる
發行者 東京市豊島區駒込一丁目二八 小糸勝次郎
印刷者 東京市豊島區西巢鴨二九九七 官尾彌三郎

發行所
東京市豊島區駒込一丁目二八
金蘭社
電話六四八五八番
電話一七〇七番

文部省認定・日本圖書館協會推薦

世界童話叢書

四六本箱入美
本頁四百
數十
十圓二
錢錢葉葉

支 那童話集 小泉一雄先生編

印 度童話集 豊島次郎先生編

ろしあ童話集 永橋卓介先生編

フランス童話集 甲田正夫先生編

ドイツ童話集 永橋卓介先生編

ベルシヤ童話集 永橋卓介先生編

イタリー童話集 永橋卓介先生編

エジプト童話集 永橋卓介先生編

お日様ごに提灯祭金の杓手の
お赤い種白の命の鐘の
長生泉の無慾の眞珠王子の
お大無慾の誠象の足跡の
女玉の空の船の神の卵の
龍の舌のイワンの話の四篇
王様の不幸な大使の指環の
色れる小袋の魔法の指環の
馬の立屋の奇妙な兵士の
馬の白蛇の奇妙な兵士の
法使のロマンの護符の二人の
世と七人の兄弟の魔法の本
はじめられた魂の魔法の本
け出た魂の魔法の本

すまし致り送御速早いさ下越申御へ社本は方の用入御録目書圖いし詳

イギリス童話集 永橋卓介先生編

アメリカ童話集 仲木貞一先生編

スペイン童話集 豊島次郎先生編

日 本童話集 甲田正夫先生編

オランダ童話集 加治亮介先生編

デンマルク童話集 大戸喜一郎先生編

トルコ童話集 永橋卓介先生編

ユダヤ童話集 永橋卓介先生編

ノールウェー童話集 大戸喜一郎先生編

ベルギー童話集 加治亮介先生編

身代り問答の泥棒修業の機織り勇士の悲し
新浦島物語の花園の猫の首返しの名優ガリ
三つの子の金の林檎の化かす力馬の木に
悪魔の瓶詰めの怪物の功名ひよつこ
魔法の森の海の怪物の空色の小鳥の贈り物
大國主の命の怪話の泥棒の九篇
嘘吐き坊さん夢を買った話の貧乏神の
鬼の旅行の和蘭を愛した鴻の鳥の話の逃げだ
した農場の其他十二篇
金色の羽根の牛の角は四本の無器用な百
姓の悪魔の騎士の天國に暫く夢狼の魚の息
子運だんまり姫の女王の鬼退治の不思議な着
と七勇士の夜の女王の魔法の魔法の魔法の魔法
と乞食の蜘蛛の蜂の狂人の魔法の魔法の魔法の魔法
思議な奴隷の悪魔の結婚の魔法の魔法の魔法の魔法
棒の親方のお嫁さん海はなぜから西の泥
牧師と寺男のあべこべの物語の東月七篇
猫の旅の妖精の女王と芝船の其他十篇
アイルランドの女王と芝船の其他十篇

すまし致り送御速早いさ下越申御へ社本は方の用入御録目書圖いし詳

新世児童話文庫

四六判箱入美本本文二〇四頁
 三色版口繪・凸版挿繪十葉
 定價五錢十送料

赤い種い種	助るこのンバ
ねこの島の	あべこべ物語
魔法の笛	鬼の旅行
不思議な島	馬鹿のワイン
狐の裁判	アノアノ箱船
小鳥仙人	太陽馬

キランエバナシ叢書	著者 水谷まさる
お菓子の國	著者 エバナシ
ワンワンのがたり	著者 千葉省三
木馬のゆめ	著者 酒井朝彦

金蘭社英雄偉人叢書

少年乃木大將	少年白虎隊	少年西郷隆盛	少年水戸黃門	空閑大隊長
爆彈三勇士				

四六版箱入美本
 定價金五十錢・送料十錢

詳細目録御入用の方には本社へ御下越早送致し下さる

日本を知る叢書

四六判箱入原色版外挿繪十葉
 定價一圓三十錢・送料二十錢

1 明治大帝	2 少年論語物語	3 少年徒然草	4 少年教育勅語物語	5 少年源氏物語
御文	題文字	序文	序文	序文
武島又次郎先生	清澤榮一先生	堀江秀雄先生	平澤文吉先生	笹川臨風先生

恩を返した話	國を救った話	チウギノ話	オヤカウカウノ話	ヨイ子ニナル叢書
秋生 祖徳 彌島 正則 乃木 將軍 ナホレオン その他 數篇	北條 時宗 和氣 清盛 東郷 大將 ジヤンダルク ソノ他 數篇	福正成 村上 龍光 菅原 道真 兒島 高徳 島崎 雪村 貞房 廣瀬 中佐 ソノ他 數篇	近江 聖人 渡邊 華山 乃木 大將 下野 行兵衛 其他 數篇	野矢 兄弟 平 重盛 近江 聖人 渡邊 華山 乃木 大將 下野 行兵衛 其他 數篇

赤子ちゃん	白子ちゃん	クマのカタパン	五つの春風	細い竹ぶえ
カマカナ一年生	カマカナ一年生	ひらがな二年生	ひらがな三年生	ひらがな四年生

詳細目録御入用の方には本社へ御下越早送致し下さる

ワウドナカタカ

葉數十繪挿・本美列六四
錢十料送・錢十五金價定

イベント・チント
吉ントノマント
生先モデンナ
夫太三ヤオヤオ
助ロノノマロノ
助らぶらぶらぶ
(ながらひ)
ウヤチンソリムネキ
ラムキツソウ
シウユ三ミズネ
うちんまはこほお
(ながらひ)

大日本軍旗物語

題字序文
陸軍中將
堀内信水閣下
著者
陸軍歩兵大尉
綿貫六助著
定價金六十錢
送料十二錢

松平道夫著・池上浩鏡
おもしろくて
爲めになる**科學の話**

ともすれば六ヶしくなる科學の話は、
誰が讀んでもすぐ分るやうに面白く書
いた本叢書は科學童話でもあり同時に
又立派な課外教科書でもあります。
四六列三百五十頁函入
挿畫三色版他豊富
定價各金九十錢(送料十二錢)

3 昆虫の巻	2 鳥と魚の巻	1 地球の巻
6 生理の巻	5 電氣の巻	4 鑛物の巻

金蘭社模範名著叢書

頁百二文本・入箱版六四
錢十料送・錢十五金價定

少年八犬傳
少年膝栗毛
赤穂四十七士
少年太閤秀吉
日米大海戰
少年楠正成

クッア アユチクピ ンランキ
本誌級高たれ生てめ始に本日
版華豪入箱版菊型大
刷トツセフオ色着く悉册全
錢二十料送・錢十八金價定
木ノ豆 トクッヤチ
イタイヘ ノ足本一
羊小 トミカホオ
ルヒア イナタキ
ウテガ ノ金

四六版美本藝術的裝幀
定價金五十錢送料十錢

金蘭社學年別童話

尋常一年童話 氷の王様	尋常二年童話 あわて殿様
尋常三年童話 けむり仙人	尋常四年童話 長はな小人
尋常五年童話 うそつき大作	尋常六年童話 地獄の役人

カタカナ
マンダラ
四六列箱入美本
本文二〇〇頁
色刷オフセット
三十二枚
凸版挿繪三十數個
定價金七十錢
送料十二錢

すまし致り送御速早いさ下越申御へ社本は方の用入御録目書圖いし詳

すまし致り送御速早いさ下越申御へ社本は方の用入御録目書圖いし詳

金蘭社名著文庫

定價金十五錢・送料十錢

少年	少年	少年	少年	少年	少年
あゝ無情	平家物語	三國志	水滸傳	世界探検	日本海大海戦

小學生の地理

日本地理物理語

全一卷

新四版六・箱入美本
 本文九百頁
 口繪三色版六頁
 其他繪挿二百餘枚
 定價金一圓
 送料二十錢

水谷さまの學年別童話

裝幀挿繪 立野正道

四六列箱入美本・本文二五頁
 オセフツ挿繪入頁凸版挿繪十二個

一年生童話	クビクビ人形
二年生童話	あざざり目
三年生童話	金のメタル
四年生童話	村の英雄
五年生童話	少年の馭者
六年生童話	涙の拍手

キンラン・セカイメイチヨ
 インツプものがたり
 アンデルセンものがたり
 エカダカシ
 カタカナ
 エカダカシ
 アラビヤン・ナイト
 グリムものがたり
 フラビヤン・ナイト
 ロビンソン・クルソー
 ひらがな
 五ばなし

新型菊版箱入美本
 本文百數十頁挿繪十四個
 定價金十五錢・送料十錢

詳細目録御入用の方は本社へ御下越し下さる早御送致し

東高
高島屋
TAKASHIMAYA

#78 B 9 D 28

¥ 0.80





少年駒香 五年生 童話

水谷さまる著





金蘭社